

地域が動き出し

棚田が輝き出す

土谷棚田の耕作者は、土谷地区の住民がほとんどです。地域の住民が棚田を多くの人に知ってほしいと、地域が主体となって棚田をPRしています。

昔ながらの農作業風景を

土谷地区の有志が手作業での田植え実演を行い、多くの観光客から好評を得ています。毎年4月の終わりに



手作業で行われた田植え実演の様子

ごろに、昔の田植え道具を使って、夕日が映える棚田に手作業で植えていきます。

きっかけは、20年ほど前に手作業で田植えを行っていた光景が、数人の写真愛好家に好評を得たことでした。土谷地区の有志が昔の田植えを再現して観光客呼び込もうと、田植えで使っていた道具や昔ながらの衣装などを準備し、手作業での田植えを始めました。

現在では、田植え実演の風景を求めて全国から写真愛好家や観光客が訪れ、実演当日には、土谷棚田展望所（※8ページ）で多くの人が田植え実演を待ちわびます。

今年は4月29日に実施され、早朝から多くの写真愛好家が土谷棚田展望所を訪れました。夕日に輝く棚田を手作業で植えていく様子は、まさに昔の農作業風景そのもので、多くの写真愛好家や観光客が毎年楽しみにしています。

棚田米のおいしさを伝えたい

土谷地区では、土谷棚田で収穫された棚田米を使ったおにぎりなどの販売を行っています。

棚田を訪れる観光客から、「棚田米を味わいたい」と言われたことがきっかけで、多くの人に棚田米のおいしさを伝えたいと、土谷地区の女性有志がおにぎり販売を始めました。今年もおよそ30キロの棚田米を使って、おにぎりや山菜おこわ、押し寿司を作り、土谷棚田展望所で販売しました。

また土谷棚田の火祭り（※6ページ）当日にも、棚田米のおいしさを訪れた多くの人に伝えました。



棚田米を使ったおにぎりを作る土谷地区の女性有志

土谷棚田を魅せる

田植え実演発起人

前田重穂さん

（福島・土谷、63）



地域の大切な文化として

棚田の田植え実演を始めたのは、昔の農作業を見ることが現在の農作業がどれだけ楽しかったかを、若い世代の人たちに知ってもらいたいという思いもあつたからです。

今では連休の風物詩として、地元有志が集まって実施しています。一日だけしか実施できませんが、多くの写真愛好家や観光客に喜んでもらえ、実演する側としてうれしく思います。

昔ながらの手作業をいつまでも地域の文化として、棚田とともに守り続けたいと思います。

多くの人に

知ってもらうために

—土谷棚田保存会の結成—

平成11年7月26日、農林水産省は棚田の維持を目的として、土谷棚田を含む134地区の棚田を「日本の棚田百選」に選定しました。

これをきっかけに棚田保全への関心が高まり、平成16年、土谷棚田の耕作者や地区住民により土谷棚田保存会（永田恵会長）を結成。棚田の景観を守るための活動が開始されました。現在は、土谷地区と協力して、棚田を訪れる観光客へ棚田の説明や耕作放棄された田んぼの管理を行うなどの棚田保全、景観保全を行っています。



土谷棚田保存会の皆さん

また、長崎県内の棚田百選に選ばれた地域と連携し、長崎県棚田保全代表者会議（長崎県棚田サミット）を開催しています。平成16年5月には、土谷地区公民館を会場に第3回長崎県棚田保全代表者会議が開催され、県内の棚田保全団体や行政関係者と意見交換を行うなどの棚田を守るための活動を行っています。



第3回長崎県棚田保全代表者会議

棚田を活用した地域活性化

—土谷棚田の火祭り開催—

土谷棚田の火祭りは、3年前の田植えの季節に、永田会長が棚田から見える漁火いさりびにヒントを得て企画されました。棚田のあぜ道にたいまつを並べ、夜の棚田を演出しようと立案。

土谷棚田に魅力

土谷棚田保存会会長

永田 恵さん
(福島・土谷、65)



棚田の魅力を引き出して

地域活性化につなげたい

土谷棚田の火祭りは、夕日に輝く棚田としての魅力を持つ土谷棚田を、多くの人に知ってもらうことで、地域活性化のきっかけになればと考えたからです。今回多くの観光客を迎え、4回目となる土谷棚田の火祭りを開催しました。全国的にテレビや新聞などで取り上げられ、今まで以上に知名度があがったのではないかと思います。

火祭りが、多くの人の関心を集めていることにとっても驚いています。今後も、地域全体の活性化につなげていきたいです。

平成15年5月、土谷地区の有志でたいまつを試作し、棚田のあぜ道に並べて火を灯したところ、そこには夕日に照らされる棚田とは違った光景が広がりました。これが火祭りの始まりです。

その後、土谷地区の住民が協力して、たいまつたいまつの改良や実施計画を検討してイベントとしての火祭りが確立しました。その年の8月には、収穫の終わった棚田で500人ほどの観客を迎え、第1回土谷棚田の火祭りを行いました。

現在に比べて観客数もたいまつたいまつの数も小規模な開催でしたが、昼間の棚田とは違った表情を見せ、訪れた



土谷棚田に力強い太鼓の音が響き渡る

観客にも好評でした。翌年からは、たいまつたいまつの炎が水面に映える5月上旬の土曜日に、多くの観客を迎えて開催されています。



たいまつたいまつの炎で輝く土谷棚田

今年も、多くの地区住民や各種団体協力のもと5月7日に開催され、その光景は全国のニュースや新聞などで大きく取り上げられました。

今年も、多くの地区住民や各種団体協力のもと5月7日に開催され、その光景は全国のニュースや新聞などで大きく取り上げられました。

今年も、多くの地区住民や各種団体協力のもと5月7日に開催され、その光景は全国のニュースや新聞などで大きく取り上げられました。

今年も、多くの地区住民や各種団体協力のもと5月7日に開催され、その光景は全国のニュースや新聞などで大きく取り上げられました。



点火される手作りたいまつ

手作りたいまつは火祭りの要！

— 地域住民の努力の結晶 —

土谷棚田の火祭りでは、2,000本のたいまつが灯されます。そのたいまつは、空き缶を利用した手作りたいまつで、強風の中でも消えにくい構造となっています。

たいまつたいまつの試作には、多くの人が知恵を持ち寄り、工夫を重ね、素材や作り方、田んぼへの立て方など、試行錯誤しながら研究しました。その結果、たいまつたいまつ本体には190ミリのスチール缶、いわゆるコーヒー缶に灯油を入れ、火を灯す芯を立て、支柱に吊り下げる方法がとられています。燃焼時間に大きな差が出ない



地域が協力してのたいまつ作成

よう、一つずつ丁寧に作られたたいまつは、約3日間隔で棚田に立てた支柱に吊り下げていきます。

点火は地区住民をはじめとした約40人で行われ、針金の先に灯油をしみこませた布を巻きつけた点火棒で、一本ずつ確実に点火していきます。

一つ一つ丁寧に作られるたいまつ

